

『未完成』

男 焼き肉、好きですか？

女N 男に聞かれたら、よだれが溢れた。肉の焼ける音に煙、キムチが浮かぶ。

男 僕はヒレステーキのほうが好きかな。

女N ステーキと聞いた心の牛が一頭、もおくと鳴いた。

女 焼き肉よりも、溶けかけの雪見大福に冷凍いちごを楊枝で刺して食べるのが好きです。

女N 色白の男の頬を見ながら、そこにいちごの私が刺される様を想う。「ふう〜ん」と、口をすぼめた男の頬がぷっくりと膨らむ。

男 今ここに僕が居て君が「1」なら、素数、言わずもがな、かわいい。

女 または、私が居てあなたが「1」なら、ここから何がはじまるのかしら？

男 どちらも、どちら。どちらからはじめましょうか？

女 もう、はじまっているんじゃないでしょうか？

女N 考えるような顔で、男は残りの珈琲を飲み干す。

女 嫌われてもいいことを前提に、申し上げてもいいですか？

女N 男が素っ頓狂に眉を上げる。

女 あなたの態度は、どちらかというと絶対値。

男 ありがとう。

女 褒めてないの。絶対値はかわいくない、権力かと。ごめんなさい。

男 数に対する君の感性は、僕にはどうも理解できない。絶対値を権力だと感じるの、絶対と言う言葉を畏れている君のころだよ。女性っての

は数に文学を見ようとしがちだけれど、それにしても安易だな。

女N 男の言葉に、気持ち良くなってくる。

男 君って人は何もないな、それで言うならば、虚はかわいい。

女N もっと強く罵倒してほしい。私は誰かに責められ、そして褒められたいのだと気が付く。いいところで店員が来て男の空いたカップを下げる。次は何を言われるのだろうか、男の黒々とした眉を見ていたら黄色い飲み物が運ばれてきた。男はそこにシロップを流し込む。氷を伝い、シロップがグラスの底に落ちてゆく。男は一息でグラス半分まですすり上げた。

男 レモネードには蜂蜜だよな。シロップでは味が交わらない。僕は人口的なものが苦手だね。レモンの刺激には蜜蜂の運ぶ甘美さが必要だと思わないかい？しかし、このレモンの味も人工的だな。

女 人工的でもいいじゃないですか。人も自然の一部でしよう？ならば、その飲み物だって自然だと言えるんじゃないかしら。

男 いいことを言うね。

女 数もかっこいいか、かっこわるいか、そんなものです、女にとって。

男 やっぱり、かわいいねえ、素数っぽいねえ。

女N 男がストローを啜えたまま笑ったので、レモネードが泡立った。

男 絶対が権力だと畏れる君は、畏れる一方でそれを求めているようにも感じるよ。審判するのが好きなようだが、日常的に君は君自身を無意識に審判し続けて生きているんじゃないかな。考える、なやむ、思いつく、待つ、眠る。例えば、早寝早起き朝ご飯。そういった全ての瞬間を自分に鞭を打つように生きている。僕は自分のことが好きでね、鞭打つなんてごめんだよ。

女 鞭、打っていますか？私。

女N

珈琲に口を付けるととっくに冷めている。  
冷めた珈琲に四面楚歌という文字が浮かんだ。

男

折角きれいにお化粧しているのに申し訳ないけれど、僕には君が七転八倒しているように映る。

女

そりゃあ美容院に行つて、きれいにお化粧してきたのに焼き肉に誘われたら、少し困りますけれど、七転八倒はしていません。

男

僕は君を焼き肉に誘っていないがね。

女

誘つて下さってもいいんですよ、会社では内緒にしておきます。

男

今日はやめておくよ。

女N

街は暖かく、四角く刈られた植え込みの葉が、柔らかかそうな新芽をつけている。

どこか浮き足立った人々の足取りに、明日から十連休だと気が付く。

「正解なんてねえよ」、すれ違った女の子が言う。どんな顔かは見えなかったが、強いくちなしの香りがした。

最寄り駅の改札を出ると、はじめてそこに花屋がある事に気が付いた。

暮れかけた羣青色の空と同じ色の花を見つけた私は、私に花をおくる。

寂しい色の花束を抱いていつもの道を歩く私は、堂々とした気持ちになつてくる。

こんにちは、希望、外に出よう、YDK、家が好き、見慣れた看板やポスターは、子供の頃から待ち望んでいた便りのように、私の胸に飛び込んでくる。

帰ったら小さなテーブルにかわいらしい布を掛けて、花を飾ろう。

「平和ってなに」、声に出して言ってみる。

素数の私から「1」という閃光が強くほとぼしる。

黎明はすぐそこだ。

今夜も寝るのだから。

※ Nは女のナレーション

作 安藤桃子と子供たち